

10/23 列王記第二 2 章 6-18 節「エリヤの神、主はどこに」

小池 宏明 牧師

預言者エリヤは、バアルの預言者たちとカルメル山で対決し、主が栄光を顕わされたので、圧倒的な勝利を治めた。エリヤが主から与えられた最後の使命は、エリシャを後継預言者にすることだった。エリヤとエリシャが最初に出会う場面は、列王記第一 19 章 19-21 節に記されている。エリヤから主の選びが伝えられたエリシャは、二度と戻らない決意でエリヤに従った。

*エリヤを離れないエリシャ

この後、エリシャはエリヤを離れずに、いつも一緒に行動している（第二列王記 2 章 2~6 節）。これは、預言者エリヤがどのように主の御声を聴いて主の働きに加わっているのか、常にエリシャが見て学ぶよい機会になった。この事は、先輩信仰者たちの背中を見て、真似をしながら、その働き（奉仕）を身に付けていくことと似ている。

*自立した預言者へ

エリシャは、エリヤの後に付いて、いつまでも一緒に行動することはできない。エリヤが居なくなる時が近づいていた。ついにエリヤは不思議な主の御力によって、天に引き上げられた。（列王記第二 2 章 11-12 節）エリシャはエリヤを失った悲しみのために自分の衣を裂いた。「エリヤの神、【主】はどこにおられるのですか」と叫ぶエリシャの不安な気持ちが伝わってくる。しかし、エリシャは、確かにエリヤの後継者として自他ともに認められるような存在になっていた。エリシャはエリヤの働きを見て学び、継承したが、それで預言者職の引継ぎが成されるわけではない。エリシャは、エリヤが居なくなると、今度は、自らが主なる神様と結び付いて、主の御声に聴き従いながら預言活動をしていくことが求められるのだ。

*私たちも信仰の継承者として

さて、私たちの古河教会は、いま 70 年目の歴史を刻んでいる。私たちは、信仰の先輩たちから、何を引き継いで、何を継承して来ただろうか。あるいは、自分も天に引き上げられる日が近いと感じておられる方々は、どんなことを後輩たちに残してきただろうか。エリヤとエリシャの関係は、互いに互いを必要としていた。エリヤは後継者のエリシャを育てながら、希望や慰めを受けたことだろう。また、エリシャは尊敬するエリヤを見習いながら成長し、独り立ちしていった。古くからいる者も、新しく加わった者も、先輩も後輩も、互いに良き影響を与え合う存在として主なる神様が出会わせて下さったのだ。互いに主なる神様との関係を深めて、自立した信仰者を目指したい。